

これはこの本から抜粋しています。

1964——日本が最高に輝いた年
敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック

ロイ・トミザワ／著
来住道子／訳

二〇二〇年に向かって

オリンピックの遺産というと、新しいスポーツ施設や交通機関、大会を組織するノウハウ、実践技術というふうには、目に見える形で開催国が得られるものであると考えられるのがふつうだ。しかし、目に見えない形で得られるものもある。それは、世界トップクラスの選手たちが全力を尽くす姿を目にした誰もが感じる刺激といったものだ。そして時には、自国の選手やチームが祖国に劇的な勝利をもたらす場面に出会えることもある。そうした瞬間に子どもや若者たちは触発され、夢を思い描き、こう信じるようになる。「頑張れば、自分にもできる！」

日本が二〇二〇年の二度目のオリンピック開催に向けて準備を進めている今日、最初の東京オリンピックのこうした側面は重要な意味をなしている。近年、未来を脅かすような出来事に遭遇しながらも、再び日本は復興力、希望、前向きな意欲といったものを象徴するような大会を作り上げようと頑張っている。

一九九〇年代初めのバブル崩壊後、日本経済は長期低迷に陥った。いわゆる「失われた二〇年」と呼ばれる時代である。市場や企業の収益（明らかな例外もあるが）が落ち込み、日本は中国にGDP世界二位の座も奪われた。国際舞台での日本の存在感は、あらゆる面において薄れてしまったと見られた。

経済や人口統計学的な問題（出生率の低下、急速な高齢化、地方の過疎化）に加え、日本はさまざまな自然災害にも見舞われた。西日本ではゲリラ豪雨や洪水、土砂崩れなどによって大勢の命が犠牲になり、いくつもの地域が壊滅的な打撃を受けた。二〇一六年には熊本で大規模な地震が起こった。中でも衝撃的だったのは、二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災で、東北地方が地震と津波に襲われ、原子力災害にまで発展した。放射能を帯びた瓦礫や汚染物質によって復興は難航し、被災地が完全に立ち直るまでにはまだまだ時間がかかる。

このような状況を踏まえて、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会は二〇一三年にアルゼンチンのブエノスアイレスで開かれた国際オリンピック委員会（IOC）総会でのプレゼンテーションの先陣役として、東日本大震災の被災地出身の佐藤（現姓・谷）真海というあまり知られていないパラリンピック選手をあえて抜擢した。佐藤は当時三歳。走幅跳の選手として二度パラリンピックに出場した。準備には時間をかけたものの、英語



でのスピーチなどそれまでほとんど経験したことがなかった。しかし、実に感動的な話を正直に飾ることなく伝えるその姿は熱い支持を集め、東京招致への追い風となった。

一九歳のとき、私の人生は一変しました。私は陸上選手でした。水泳もしていました。チアリーダーでもありました。そして、足首に痛みを感じてから、わずか数週間のうちに骨肉腫のために足を失いました。もちろん、それは過酷なことでした。私は絶望に打ちひしがれました。でもそれは大学に戻って再び陸上を始めるまでのことでした。

佐藤は足を失ったことをきっかけに走幅跳を始め、目標を持ってそこに向かって努力して達成する、そんなスポーツのシンプルな考え方に夢中になっていった。そして二〇〇四年のアテネ、二〇〇八年の北京のパラリンピック二大会に出場した。

「私はスポーツの力に感動し、自分は恵まれていると思いました」と佐藤はスピーチで語った。「だから二〇一二年のロンドン大会も楽しみにしていました」

ところが、思わぬ災害が襲い掛かった。

津波が私の故郷の町を襲いました。六日もの間、家族が無事であるかどうかもわかりませんでした。そして家族は見つかりましたが、国民の深い悲しみを思うと、自分の個人的な幸せに浸るどころではありませんでした。

東北地方を襲った地震と津波を生きのびた他の多くの人たちと同様、佐藤も支援活動にあたった。各地で受け取ったメッセージを被災地に伝えたり、被災者に自分の体験談を話したり、食糧を運んだり、さらに、被災した子どもたちの日々の不安が少しでも和らぐようにスポーツイベントの準備にも携わった。

そのとき初めて、私はスポーツの真の力を目の当たりにしたのです。新たな夢と笑顔を育む力。希望をもたらす力。人々を結びつける力。

佐藤真海はそういった力を最近にいたるまで何年にもわたってさまざまな人たちに伝えてきたが、それを受け取った一人が埼玉出身の高桑早生という女の子だった。高桑は小学六年生のとき、テニスと陸上に打ち込んでいた。ある日、ハードルの練習後、左足に痛みを覚えた。その痛みはなかなか取れなかった。調べてみると、膝下が骨肉腫に侵されていることが判明したが、最初はそれが悪性なのか良性的なかわからなかった。だが結局、足を切断することになり、周囲に支えられながら四度にわたる手術や化学療法、髪の毛が抜ける苦痛にも耐えた。それでも再び歩くことができるのかどうかもわからず、高桑は絶望に苛まれていた。

母親の洋子は、娘を何とかして立ち直らせようと思った。そんなとき、友人から佐藤真海の書いた『ラッキーガール』という本をもらった。その本を読んでもみると、娘と同じような体験談が書かれており、これならきっと本人も今後の自分のためになると思ってくれるはずだと考えた。その本に書かれていたことは、たしかに彼女の力になるものだった。

自分と似たような体験をした人がこれほど前向きに生きていることを知って、とても元気づけられました。この本のおかげで、世の中にはいろいろなチャンスがあって、スポーツをあきらめる必要もないんだとわかったんです。人生のどん底にいたとき、

スポーツが私を支えてくれましたが、だからといって、すぐにパラリンピックの選手になろうと思ったわけではありません。そのときは自分の将来のことなんて、まるでわかりませんでした。ただ、一日一日を乗り切ることで精いっぱいだったんです。

さらに高桑と母親は、ある義肢装具士から想像もしていなかった希望を与えられた。

義足に慣れてくれば、また学校に通えるようになります。高校にも大学にも行けます。就職して結婚することもできますよ。

佐藤真海の経験談やその義肢装具士から新たな可能性をもらったおかげで、高桑は練習を重ねるにつれて義足で動きまわれるようになった。実際に再び歩けるようになったのだ。そして、さらに力強く動くコツも身につけた。太ももの筋肉に意識を集中させてバランスを取ることで、まっすぐに思いっきり再び走れるようになったのだ。

あのころは、自分の限界なんて考えもしませんでした。ただ、みんなと同じことができるようになってうれしくて仕方がなかったんです。だから、いろんなことに挑戦しました。何をするにも全力を尽くしました。その気持ちを忘れずに、ずっと走り続けたいと思っています。

元気を取り戻した高桑は、二〇一二年のロンドンパラリンピック、二〇一六年のリオデジャネイロパラリンピックの二大会に出場した。そして今度は二八歳で迎える二〇二〇年の東京パラリンピックを目指して、元気を与える存在として頑張ってもらいたいものである。

佐藤真海はブエノスアイレスで開かれたIOC総会でのスピーチで、被災した故郷の話に触れ、選手たちやそのオリンピックの価値を表現する姿は人を元気づける力になると訴えた。

日本そして世界中から、二〇〇人を超えるアスリートたちがおよそ一〇〇〇回にもわたって被災地を訪ね、五〇〇〇〇人以上の子どもたちを元気づけています。そこで私たちが目にしたのは、かつて日本では見られなかったオリンピックの価値が及ぼす力です。そして、日本が目当たりにしたのは、そうした貴重な価値あるもの、卓越したもの、友情、憧れといったものが、言葉以上の大きな力をもつということです。

最高のパフォーマンスから生まれる素晴らしい記録、紛れもない謙虚な姿勢、惜しみない努力、想像を超える粘り強さ。そういったものを目に焼きつけて継承していく子どもたちや若者たちこそがオリンピックの遺産といえる。選手が互いに尊敬し合う気持ちや、文化の違いや強さをそれぞれの立場から認め合うこと、そして開催国として復興力や運営能力に優れ、友好的で、ホスピタリティを備えていることを諸外国に示すチャンスといった

ものもオリンピックによってもたらされる。一九六四年の東京オリンピックには、そうした機会があふれていた。あらゆる点から考えて二〇二〇年の東京オリンピックが、そのさらに上をいく大会になることは間違いないだろう。